



51 85 09-70001-0 P

WSP

53t	55t
28PL	

*Prophesy of a murder on the Orient
Express tour of Japan... Will the "blue prima donna"
be stained with scarlet blood?*

SAKAKI SAI

斎藤 栄——さいとう・さかえ

1933年、東京生まれ。東京大学法学部卒。

1966年、横浜市役所在勤中に『殺人の棋譜』で第12回江戸川乱歩賞を受賞。

1972年、作家専業となり、以後、旺盛な創作活動を続け、

本格・社会派・エンターテインメント性を盛り込んだミステリーは、
多くの読者を魅了している。

“江戸川警部”シリーズ、“タロット日美子”シリーズは大ヒットしている。

FUSO
MYSTERY
500

オリエント急行殺人旅行

1988年12月6日 第1刷

定価———700円

著者———斎藤 栄

発行者———片岡政則

印刷所———株式会社集美堂

発行所———株式会社扶桑社

〒162 東京都新宿区市谷台町6番地

電話03-226-8880(代)

©SAKAE SAITO 1988 Printed in Japan

ISBN4-594-00368-0

万一、乱丁・落丁の場合はお取替えいたします。

書下ろし長編ミステリー小説

オリент急行殺人旅行

*Prophesy of a murder on the Orient Express
tour of Japan ... Will the "blue prima donna"
be stained with scarlet blood?*

斎藤 栄

CONTENTS

オリエント急行殺人旅行

第一章	発車前	5
第二章	美しき人々	25
第三章	出発の後で	48
第四章	豪華料理	73
第五章	予告殺人決行	91
第六章	捜査	111
第七章	北海道の朝	134
第八章	真相	157
第九章	反論	174
第十章	美也子の証言	195
第十一章	意外な真相	215
第十二章	京都の旅	230
藍色の貴婦人との旅	上月晃	248
オリエント急行を愛したクリステイ	数藤康雄	254

造本・装幀——川上成夫・こやまたかこ

カバー写真——斉藤清貴

口絵写真——斉藤清貴・MANABU MATSUNAGA

山口健次

本文作図——杉山モトム

第一章 発車前

1

フジテレビジョンが開局三十周年記念特別企画として、ヘオリエント急行88〳〵を実施しようとする、十月中旬のことであつた。

警察庁鉄道警察隊特捜隊の隊長、井筒警視は、隊員の中で、最も敏腕を誇っている江戸川きょうたろう 警察部と尾瀬刑事の二人を、特別に自分の部屋に招いた。

「江戸川君、今度、君に、急遽、特別の仕事をしてみたい」

「何ですか」

と、江戸川は訊いた。

「これだよ。これを見たまえ」

と、井筒は、フジテレビジョンが作成したヘオリエントエクスプレス88〳〵のパンフレットを差し出した。

「これは？」

と、警部が訊いた。

「今度、君たち二人に乗車してほしいのは、このオリエント急行なんだ。君も知っていると思うが、栄光とロマンにあふれたオリエント急行が、今回、日本に来る。そして、この二十四日から十日間の日本一周旅行に旅立つわけだ」

「はい。それは知っております」

と言つて、江戸川警部はパンフレットを開いた。そこにはこんな文句が並んでいた。

へその氣品にあふれた空間、贅を尽くした寢室、三星のレストランに優るとも劣らない料理、ヨーロッパの伝統がはぐくんだ最上のもてなしを、どうぞ心ゆくまでお楽しみください。百年の時を越え、今、あなたはベル・エポックの旅へと」

「まあ、そのパンフレットに書いてあることはゆつくり読んでもらうとして、とにかく、今回、そのオリエント急行には、それにふさわしい人たちも極秘に乗り込むことになっている」

「そうですか。例えばどんな人ですか」

「うん、君達には説明をしなければいけないだろうが、特にその中に、今、世間で騒がれているリクルートの関係などで問題になっている、国会議員の大谷先生、その奥さんで女優の平泉志保さんなど、かなりの有名な人が乗ってくる。細かいことはまた君に、別に書いたもので渡すけれども、どうもはつきりしないんだが、ハニー・ビー・カーという車輛に乗るその人たち

を狙って事件が起こりそうだよ」

「事件と申しますと？」

「うん。じゃ、今度はこれを見てくれ」

そう言つて、井筒警視は、自分の机の引き出しを開けると、中から一枚の紙を取り出した。

「これは実は、わが方に密告された文書なんだ」

江戸川警部は、その紙を読んだ。それは、まず大きく、

〈殺人予告〉

となつていた。文面は非常に簡単で、

「十月二十四日から始まるオリエント急行十日間の旅行の間に、必ず殺人事件が起きるだろう。

信じるかどうかは勝手だ。誰もそれを防げないはずだ」

というような文句が書いてあった。そして、最後には、その文書の主のものと思われる、

〈死刑執行者一同〉

という字が読めた。これらはいずれもワープロで打つてあったので、筆跡等を鑑定することはできない。

「これはひどいですね。明らかに意識的に妨害をしようとしているんです」

と、江戸川警部は言った。

「そうなんだ。しかし、悪質ないたずらかもしれない。本気かもしれない。そのへんはまった

く分からない。とにかくこれは、天下に公表するわけにはいかない。そんなことをすれば、旅行者はみんなパニックに陥る。だから、これからわが方は、関係者を各所に配置して、これを警戒しようと思うんだが、とにかくこの十日間の日本一周旅行の間、君たち二人に乗車してもらって、特に警戒してほしいと思うんだ」

「分かりました。とにかく、われわれ警察庁鉄道警察隊特捜隊の名誉にかけて、乗車いたします」

「うん。君のことだからやってくれると思うが、よろしく頼むよ。ただ、一つ注意しておくが、旅行者たちに見咎められるといけないから、そういうことのないように、普通の旅行者のような顔をして乗ってほしい。おそらく最初の晩は徹夜になるだろう。オリエント急行はワゴンリと言われるぐらい、つまりこれは寝台車だ。だから君たちは、その列車が走ってる間は警戒を厳重にして、眠らないでほしい。そのために、昼間は休んでもらうことになるだろう」

「分かりました」

と、江戸川警部は答え、部下の尾瀬刑事のほうを見た。二人は瞳と瞳で頷き合った。

2

井筒警視のもとから自分たちの部屋に戻った江戸川と尾瀬は、二人だけで話し合った。「尾瀬君、これは容易ならぬ任務だ。君もオリエント急行のことは知ってるだろう」

尾瀬は頷いた。

「知ってますとも、あんな有名な列車のことは、乗らぬ者だって、誰だって知ってますよ。あれはたしか、一八八三年の十月四日でしょう、パリからイスタンブールに向けて栄光の旅が始まったのは」

「ホウ。君もなかなかのもの知りだね」

「いや、そうでもありません」

と、尾瀬は笑った。

「さっきのパンフレットに書いてあるのを、ちよつと盗み見ただけですよ」

「なんだ、そうなのか。ま、とにかく、戦前は世界中の王侯貴族や、富豪や政治家、あるいはスターたちが乗った有名な列車なんだ。それが第二次大戦でいったん駄目になって現在はどう、走らなくなったものを、再びイントラフラッグ社のグラット社長というのがこれに手を加えて、ノスタルジー・オリエント急行として蘇らせたわけだよ。それが今度はいよいよ、日本へやってきた。まあ、鉄道警察隊の一員としておれも乗ることになるうとは思わなかった」

江戸川も、溜め息をちよつとつきながら言った。

「しかし、これは重要な任務だと思います。私も張り切ってやらせてもらいます」

と、尾瀬が言った。

「そうだ。とにかく、こういう仕事は、スリの取り締まりとは違って、われわれが守らなきや

ならない人たちはかなり有名人だ。だから、責任はずしり、肩に重いつてわけだ。またやり方も難しいと思う。これから井筒警視にいただいた名簿を検討してみようじゃないか」

そう言つて、江戸川警部は、ポケットから書かれたものを取り出した。

「それですか、問題のハニー・ビー・カーに乗る人たちは」

と、尾瀬刑事が言つた。

「そうなんだ。問題の号車ナンバーはあくまで秘密にしておかなければいけないが、ここに乘る人たちの誰かが狙われているに違いないと井筒さんは言っている。だから、われわれは、この通称ハニー・ビー・カーと呼ばれる車だけを対象に絞ってみようと思うんだ」

「……えーと……」

と言いながら、尾瀬はその紙を見つめた。

江戸川が言つた。

「まず、問題の大谷議員、そしてその奥さんの平泉志保さん。この人がまずメインだ。それから次に、外科の有名なお医者さん、これは菊沢要介先生といつてね、まあ、日本というか、世界的な素晴らしい外科のお医者さんだ。この人が桂れいさんという女性と乗る。どういうご関係か分からないが、とにかくそんなことはわれわれにとって構わない。ま、外科の医者というものもなかなか患者から喜ばれることばかりではないらしくて、味方もいれば敵もいるという商売なんだそうだ。」

それから、これは、おれがちよつと気になるんだが、国際エンタープライズ社の社長の御曹司で、大徳寺欣也という青年が乗る。この青年の恋人、小石崎京子さんという人。まあ恋人のほうは問題じゃないだろうが、何しろ国際エンタープライズといえば、これは、その親父さんの大徳寺社長がかなりあくどいことをやっているから、恨んでいる人間もいるだろう。このへんが一番の、危険な運命を担っている人たちじゃないかと思うよ。

このほかに、有名な女流作家、印東すばるさん、それと養女で秘書を兼ねている雫かさねさんというのが乗る。実は恥ずかしいけれども、おれはまだ印東さんの小説を読んではいないんだが、かなり売れているらしい。この人たちが狙われているとは思えないけれども、しかし、やはり気をつけなきゃいけないだろう。とにかく非常な有名人だ。

それから有名人といえば、この画家の中林悟堂氏。これは現在、日本の洋画壇では有名な人らしい。おれもいつぞやどこかの画廊で、裸婦のでかいやつを見たよ。なかなか迫力がある絵だった。今回は更科マキさんという人と一緒に乗るらしいが、おそらくこれはまあ、奥さんじゃないから、モデルさんか、あるいはまあまあという関係の人だと思うよ。それから更に、世間を騒がせそうなのは、歌手の吉池みつる、これが乗ってくる」

「ホウ」

と言いながら、尾瀬刑事は、その隣に並んでいる名前を見た。

「森山雅乃といえ、これは、例の有名な歌手だった人じゃないですか、今は引退したけれ

ど」

「なんだ、君はその程度しか知らないのか。二人は有名なラブロマンスで結ばれて、結婚したんだよ」

「警部、私だってそのくらい知ってますよ。しかし、この号車にこんな二人までが乗っているとなると、狙われているのは誰だかさっぱり分かりませんね」

「そうなんだ。まったく分からん。だからこそ、われわれが乗り込む必要があるってわけなんだよ」

と、江戸川警部は言った。

「オリエント急行を無事に日本一周させるために、われわれが乗り込むってわけですね」

「そうだ。任務は重いよ。それをやり遂げなければ」

「分かりました。とにかく全力を尽くしましょう」

「では、作戦だが」

と、江戸川警部は言って、二人は額を合わせた。

「一番の問題は、この殺人予告状を送ってきた〈死刑執行者一同〉という文句です。これは犯人が複数であることをにおわせていると思うんですが」

と、尾瀬は言った。

「そこだよ。その点がおれも第一に引つかかる。だから、犯人が複数であることをあらかじめ

計算に入れて、対策を立てなきゃならない。それにはだ」

と、江戸川は、そこで声を低くした。

3

一九八八年十月二十四日は月曜だった。

そのお昼ごろ、オリエントエクスプレス88日本一周記念に参加する人々は、三々五々、上野駅ヘラ・プエルタという店の前に集まり始めていた。集合時間は午後一時だった。

この人々は、一人、八十八万八千円という大金を支払って、この素晴らしい列車の貴婦人ヘオリエント急行に乗車する人々であった。

もともと、江戸川警部や尾瀬刑事がそれとなくマークする有名人の一行は、ひそかに別のコースをたどって、列車内に乗車するように手配されていた。もしそうでないと、このヘラ・プエルタは、その見送り人や、あるいはファンの人々のために、大混乱に陥ることは目に見えていたからである。

レストランヘラ・プエルタは、上野駅の中央改札口に向かって左手、みどりの窓口の近く、ちようど上野駅正面玄関から中央広場に入ったところにある店であった。

当日はやや曇っていた。

江戸川と尾瀬の二人は、正面玄関から浅草口のほうへ廻り、地下鉄へ下りるところから中央

改札口のほうに歩いてきた。そこに来ると、ヘラ・プエルタのの前には、JR東日本の関係者や、あるいはフジテレビジョンの関係者など、係員が、そこにテーブルを並べ、受け付けの態勢をとっている姿がよく見られた。

「日本一周旅行」の横断幕は出ていたが、それはそれほど華々しいものではなかった。ちょうど天皇陛下のご容体が刻々と報じられている時であり、そのご病状のために、あまり派手なこととはしないよう、自粛しているからであった。

そのほうに向かつて二、三步、歩きだした江戸川と尾瀬の後ろから、声をかけた者があつた。振り向くと、そこに、瓜生美也子と明美の姉妹きょうだいが立っていた。

「おう」

と、江戸川は思わず低く言った。

この美しい姉妹は、実は、主として東海道線のグリーン車を中心に、あこぎな稼ぎをしている人たちを狙ったハコ師であつた。いつかはこの二人を逮捕しなければならない宿命にあつたが、今日の江戸川と尾瀬はそれどころではなかった。

「お二人は、あのオリエント急行に乗るんでしょう」

と、美也子は言った。このところ、めつきり女らしさが増して、その美貌はあたりの人目を奪うほどだった。

「おれたちがどこに乗ろうと、君たちに何の関係もない」

と、江戸川警部は、少し不機嫌そうに言った。

「いいのよ、事実を聞こうなんて思つてないんだから。でも、うらやましいわ、あんな素晴らしいオリエント急行に乗れるなんて」

「おまえたちはどこへ行くんだ」

と、尾瀬刑事が訊いた。

「私たちも、ほんとは乗りたいの。だけど、あの人たちは何しろ十五倍の競争率を突破して当選したうらやましい人たちなんだから、ほんとにいいわ。私たちは仕方がないから、まあ、この辺をブラブラして、それから、また伊豆のほうへでも行こうかと思つてるの」

と、妹の明美は言った。

「勝手なことをするんじゃないぞ」

と、江戸川警部は低い声で言った。

「あら、私たちだって勝手なことをする権利はあると思うわ」

と、明美は負けずに言った。

「おいおい、オリエント急行に乗れないからつて、そんなにふくれっ面をすることはないぞ」
と、尾瀬刑事は冷やかした。

「ほんとうにいいわね。お姉さま、さ、行きましよう」

と、姉妹は互いに顔を見合わせると、美也子は江戸川に軽くあいさつして、雑踏の中へ姿を